



# 特集

# 鉢形城歴史館 平成22年秋季企画展

## 正龍寺～鉢形城ゆかりの文化財～

開催期間／10月9日(土)～11月23日(火・祝日) ※10月12日(火)、18日(月)、25日(月)、11月1日(月)、4日(木)、8日(月)、15日(月)は休館日です。  
開館時間／午前9時30分～午後4時30分 ※入館は午後4時まで  
入館料／大人200円、高校生・大学生100円、中学生以下・70歳以上・障害者手帳をお持ちの方は無料  
問い合わせ／鉢形城歴史館(☎586・0315)へ。

平成22年秋季企画展は、大字藤田の高根山藤源院正龍寺所蔵資料を展示します。  
正龍寺住職・菅蒲龍兆氏のご協力を得て、寺宝である古文書・絵画・工芸品など32点を展示します。多くの寺宝を展覧できる機会は今回が初めてです。  
ぜひ、鉢形城に関係する貴重な品々をご覧ください。

### 正龍寺の由来

正龍寺の山号は高根山と言いますが、その由来は花園城主初代藤田五郎政行が、当地である藤田郷を領して、花園城(別名藤田城)を築城した際にその北側の高根山の上に箱根権現社を祀り、箱根と高根を合わせて高根山と称したと言われています。  
『高根山正龍寺鑑觴記』によると、禪宗である臨済宗の名僧乾翁瑞元和尚が、諸国修行中、天文年間(一五三二～一五五五)の初めのころ当地へ立ち寄ったところ、一面萱野原で、付近に大きな池があつたそうです。その池には龍が住んでおり、住民に害を及ぼしていました。そのため、龍を恐れて人々は近づけず、付近は荒野原となっていました。

そこで、和尚は法力によって池の龍を教化したところ龍は生天(昇天)し、緑色の衣服をまとった神の姿となって現れました。龍の化身は和尚に礼を述べ、「この地に寺院を建立すれば、私が護りましよう」と言い残し、南へ飛び去って行きました。

和尚は、住民を安堵させるとともに、この地を開き一寺を建立し、青(正)龍寺と称したと伝えられています。

当初は、臨済宗のお寺であつたのが、曹洞宗龍穩寺の布州東幡和尚が中興したため、それ以後曹洞宗の寺院として現在に至っています。



新編武蔵風土記稿に描かれた正龍寺

### 正龍寺の歴史

正龍寺は、在地の豪族である藤田氏と深い係わりがあり、開基(寺院の始まりの際、経済的な支援を施した人という意味)と言われる花園城主十五代藤田康邦以前でも手厚い保護を受けてきたものと思われれます。

先の由来のほかに、次のような話も伝わっています。  
貞和四年(一二四八)、花園城主十代藤田左衛門太郎泰氏(とよゆき)のとき、臨済宗の僧の実翁和尚が、高嶺山青龍寺と改名しました。もともと別の寺が存在していたようですが、その寺名や開基についての伝承は確認できていません。

また、応仁二年(一四六八)、古河公方足利成氏と関東管領上杉氏との対立から端を発した享徳大乱により青龍寺が焼失したとの伝承もあり、いったん青龍寺は途絶えてしまったのでしよう。

それ以後、天文年間に至るまで、その場所は荒れ果てた状態であったようです。そのような状態であったことから、人が近づくこともなく、由来のような龍の住まいの伝承が生まれたのかもしれない。

先の『鑑觴記』によれば、天文元年(一五三二)春、臨済宗の僧乾翁瑞元和尚が高根山青龍寺を建立しました。この際、池を埋める作業や建立する資材等を提供したのが、花園城主十五代藤田康邦と言われています。そのため、正龍寺の開山(寺院を始めた

僧)は乾翁和尚、開基は藤田康邦と伝わっています。

正龍寺は当初、「青龍寺」と記され、その後「昌龍寺」とも伝えられていますが、紛らわしいので、ここからは「正龍寺」で統一していきます。

『鑑觴記』によると、正龍寺は乾翁瑞元和尚の名声を慕い、多くの学僧が集い、人々の信仰も集まり、南側の林を開拓し集落が開かれました。それが、常木村(現寄居町)となったと言われています。

そのころ、藤田康邦は天神山城(長瀨町)へも進出していましたが、乾翁瑞元和尚の後継者が決まっていなかったため、天文一八年(一五四九)、天神山の麓で庵を結んでいた教庵舜説和尚を招き、正龍寺の僧籍を継がせました。教庵和尚は曹洞宗龍穩寺九世布州東幡和尚に師事していたと言われ、その説法も大層なものであつたらしく、学僧らは競って門下に入り、常時千人を下回ることはいはれませんでした。

しかし、教庵和尚は自分の技量不足を感じており、正龍寺の中興第一祖としては、師匠である布州和尚がふさわしいとして、自ら龍穩寺へ出て向き説得しました。  
布州和尚はその要請に応え、正龍寺でも説法を行うことになりましたが、教庵和尚に対しては、正龍寺の第二世となり、その系脈が絶えることのないよう教え諭しました。

なお布州和尚は、他にさいたま市岩槻区の洞雲寺、神奈川県伊勢原市

の保国寺の開山にもなっています。  
天文二二年(一五五三)になると、藤田康邦は一族の菩提寺である正龍寺門前が衆徒らで賑わうことに喜びを感じつつも、本殿などの建物が断壊の巢になるほど古びてしまっていることを嘆き、伽藍(寺院の建築物)の再建を発起しました。このころ康邦は出家し、藤源院天山祖繁大禪門と号し、さらに北条氏康の四男氏邦を養子に迎え、自らは用土城に隠居したと言われています。正龍寺の院号は、康邦の藤源院から名付けたものと言われています。

その大殿は弘治元年(一五五五)四月に完成し、康邦の夫人である西福御前は京から絵師を呼び寄せ、康邦の肖像を描かせました。今回の展示品である「天山御影之箱」の蓋の裏面にその経緯が記されています。

康邦はそれ以前から病に伏せていましたが、ついに九月十三日に逝去しました。

正龍寺の伽藍再建は残された西福御前を中心に進められ、本尊として定朝作と伝わる釈迦文殊・普賢の三尊仏を安置しました。  
康邦の死後、北条氏邦が藤田氏の影響力を利用し秩父地域を北条領国化するにつれ、正龍寺も氏邦の菩提寺となっていました。

北条氏邦の幼名は乙千代と呼ばれ、その乙千代文書の永禄五年(一五六二)四月二日付けの文書には次のように記されています。

### 展示品の一部をご紹介します

町指定文化財を中心に主な寺宝を紹介します。

#### 北条氏政書状 (町指定)

小田原北条家四代当主北条氏政からの書状で、上杉謙信との同盟のため、三郎(氏秀、氏康の子)が養子として上杉方へ出立するところ、遅れてしまったために、直接の交渉担当であった遠山康光を派遣したという内容になっていきます。なお康光は、三郎に従い越後に入国し、御館の乱でも討ち死にしています。



#### 北条氏邦書状 (町指定)

氏邦の第二子亀丸が得度(出家)し、「鉄柱」と名付けられ、その名のごとく、道心堅固であれと願う氏邦の親心をかいま見ることできる書状です。

